ほない歴史通信

第１２０号

2026(令和 8).9.1

金町の観音堂と益子家

金町から県道大子那須線を北上すると、池田橋の少し手前の山側に観音堂がある。益子志摩守が病門の場所（病気にかかりやすいとされる家相の方角）に建立したとされ、境内には益子家代々の墓地がある（石井良一『奥久慈膝くりげ』）。益子家は、下野益子庄高館の城主の後裔が大子の地に移り住み、寛永十年（一六三三）、益子和泉兼継の代に、水戸藩では初めて郷士に取り立てられた旧家として知られている（瀬谷義彦『水戸藩郷士の研究』）。今回は、観音堂と益子家に関して、新たな資料と当家に伝わる逸話を紹介する。

まず、茨城県立歴史館に所蔵されている「益子氏系図（大子村益子氏）」（高橋清賀子家文書。以下、「系図」）である。高橋家文書は、水戸藩の学者、豊田天功（一八〇五～一八六四）、小太郎（一八三四～一八六六）父子の子孫に伝わったもので、天功と小太郎は、歴史編纂事業を行っていた彰考館の総裁を勤めている。

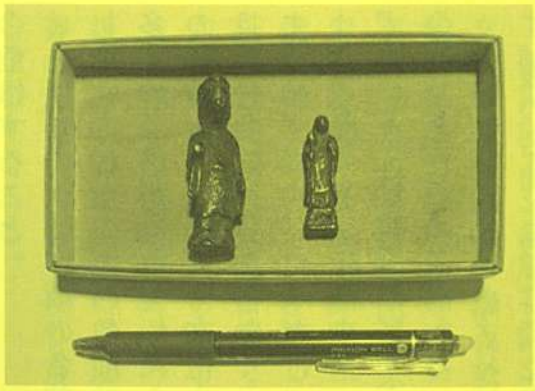
系図には、始祖の「紀貫之男始常州給信田郡、次宦、紀仲之、安和二歳行四十八才卒」から「益子逸平兼辟」までが記載されている。益子家が歴代の水戸藩主に「御奉公」した事蹟が記載されており、作成者は益子家の関係者と考えられる。また、資料の一枚目には「豊田之図書印」が押印されていることから、天功又は小太郎が彰考館に勤めていたときに収集されたものであろう。

系図の最後に見える逸平兼辟（後に民部左衛門を襲名）は、明治元年（一八六八）、天狗党の追討を受け、八日市場の戦いで亡くなっている。系図では、逸平兼辟が民部左衛門を名乗っていないことから、作成の時期は家督を相続する以前と考えられる。

系図によると、志摩守の嫡子の和泉守兼継は初代藩主頼房から百石の士分として取り立てられ、藩直営の小久慈金山の元締めを勤めた。家来一七〇人を抱え、土手や堀構えを持つ屋敷を持ち、藩主を迎える御殿があった。兼継の息子の郷左衛門は二代藩主光圀から郷士に召し出され、五十石と民部左衛門の名を拝領し、光圀が西山荘に隠居後、息子の卯兵衛と御前に度々勤めたという。

観音堂の建立の経緯については、次のように記載されている。和泉守兼継が藩主頼房の平癒宿願のため、西国三十三所と大社参りをし、尾張藩主、紀伊藩主にも御目通りを得た。帰国の後、観音堂を建立し、お札を納めたが、藩に無断で出かけたため、お叱りを受けて謹慎したという。なお、観音堂は屋敷に建立されたとあり、後に現在の場所に移築されたのかもしれない。

また、現当主の薫氏が祖母から聞いていた話によると、観音堂には小仏二体（写真）が安置されていたが、いつの頃か自宅で保管されるようになった。薫氏の父、故寛寿氏が出征する際、祖母は小仏を襟に縫い付けて持たせたという。この小仏は、薫氏によって今も大切に保管されている。

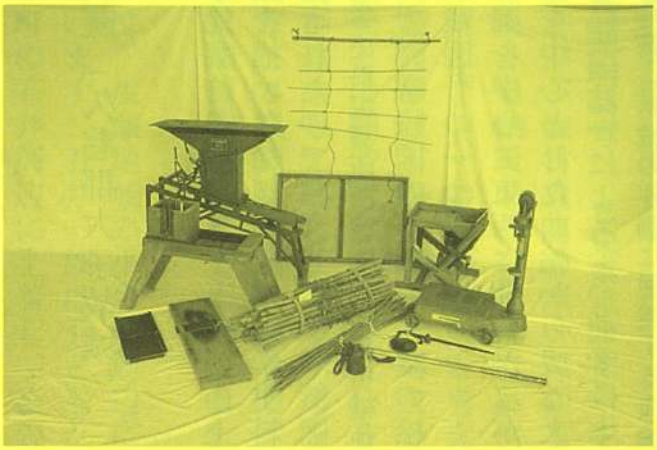


現在、益子家に残る資料について、薫氏のご協力を得て、大金祐介氏（歴史資料調査研究員）、石井裕氏（学習院大学史料館客員研究員）と調査を進めている。調査の成果については、今後、本誌上でも紹介していきたい。（小松崎研）

【大子町内指定・登録文化財紹介（3）】









常陸大子のコンニャク栽培用具及び加工用具

区分・種類　国登録有形民俗文化財
登録年月日　平成二十六年二月二十四日
所在地　大子町大字川山九七九―一
管理者　大子町

コンニャクカゴやドンゴ入れなどのコンニャク栽培用具八十五点及びコンニャクを薄切りにするカンナや干す際に用いるミゴ、串などの加工用具六十一点は、国登録有形民俗文化財に登録されており、これらの用具を通して、コンニャクの栽培から荒粉にするまでの工程を知ることができます。宮川コミュニティセンター内の「大子町昔の暮らし資料館」に展示してあり、コミュニティセンター開館時（水曜日及び祝日を除く月曜日から金曜日の午前九時から午後五時）に無料で見学できますが、コミュニティセンター職員が外出等で不在の場合もありますので、見学希望の際は事前に御連絡をお願いします（七二―〇四五四）。

〈参考文献：大子町教育委員会編『大子町の文化財（改訂版）』（二〇一六）〉

（山崎仙一）

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
　　大金　祐介（大子町歴史資料調査研究員）
　　小松崎　研（大子町歴史資料調査研究員）
　　山崎　仙一（大子町教育委員会事務局）
　　村田　光（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
　　久慈郡大子町大字池田二六六九番地
　　☎0295（72）1148
発行日　二〇二六年（令和八）九月一日